

G-09

「もの」を通じて生まれるつながり
——プロジェクト FUKUSHIMA! 福島大風呂敷を事例に

蒔野 真彩（東京大学大学院総合文化研究科／IHS 修士課程1年）

私はこのプロジェクト FUKUSHIMA! というアートプロジェクトの中の福島大風呂敷というアートを通してのものと人、そしてものを介した人と人のつながりというものについて考えてみたいと思います。これを考えるにあたって、人がものにどういう意味を込めるかとか、そういう人からの視点ではなくて、ものが何を人にさせるのかという非人間中心主義的な視点からこのアートについて考えてみたいと思います。

今回、大風呂敷がそこに関わる人にどういう影響をもたらすのかということを考えるにあたって、「作る」「広げる」「つながる」という三つのフェーズに分けました。この風呂敷自体が、写真で分かるように10mくらいあってすごく大きいものなんですけど、これを一緒に縫ったり広げたり畳んだり、すごく手間のかかる共同作業なのですが、それを通して人々がつながっていく過程というのをお話しできたらと思っています。また、現在これは福島だけでなく福島以外の地域にも広がっていて、札幌とか名古屋とか、今年はニューヨークでも広げられたりしています。そういうふうに地域を越えた大風呂敷ネットワークが生まれています。

それについて私は、〈共〉の領域を生み出す仕掛けとして大風呂敷を捉えました。この〈共〉というのはもちろん、福島と福島以外という、エンパワメントという意味での〈共〉でもあるんですけど、何かそれをもう一つ越えた、大風呂敷が可能にしている共同性のようなものがあるのではないかと考えていて、ここは実際まだあまり言語化できていない部分もあるので、実際に私がこの夏参加した経験も交えながら皆さんとお話しできたらと思います。

「もの」を通じて生まれるつながり
 —プロジェクト FUKUSHIMA! 福島大風呂敷を事例に—

東京大学大学院総合文化研究科/多文化共生・統合人間学 (IHS) プログラム 修士課程 1年 蒔野真彩

<目的>

・“もののエージェンシー”という視点から、福島大風呂敷が参加者に与える影響を分析することで、ものとの関係、ものを介した人々の関係について考察する

<ものエージェンシーとは>

・芸術人類学者アルフレッド・ジュールは『Art and Agency』(1998)において、もの(アート)を行為の媒介物(エージェント)とし、見る人に様々な感情や行為を引き起こすか(エージェンシー)を分析

・「人がものにどのような意味をこめるか」という人間中心主義的な視点ではなく、「ものが人に何をさせるか」という非人間中心主義的な視点
 cf.床呂部哉・河合春史(2011)『もの人類学』

<福島大風呂敷とは>

「プロジェクト FUKUSHIMA!」の一連の活動の1つ

◎プロジェクト FUKUSHIMA!

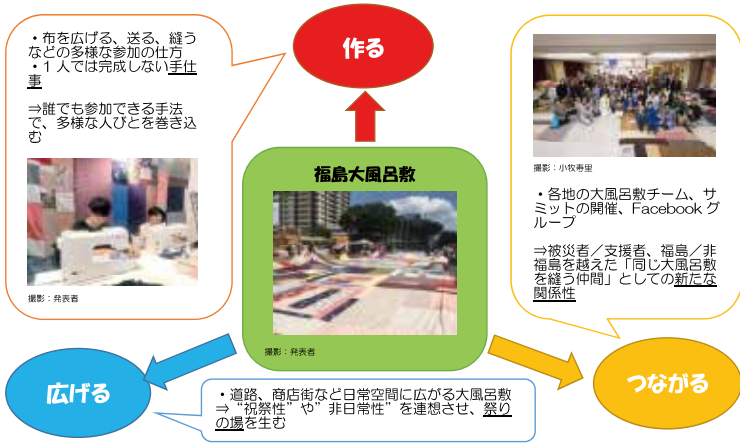
- ・2011年の東日本大震災後、「FUKUSHIMAをポジティブに変換する」を掲げ、音楽家・大友良英氏を中心とした福島にゆかりのあるアーティストや詩人らにより始動したプロジェクト
- ・立場や主張の違いに関わらず、誰もが参加できる「分断のない場」を目指している
- ・これまでに、「フェスティバル FUKUSHIMA!」や「放射線の学校」、「音楽ワークショップ」などを開催

◎福島大風呂敷

- ・初年度はフェスティバル会場の放射線対策として制作されたが、現在は「違いを縫い合わせて1つの場を作る」というプロジェクトの精神を示すアイコンとなっている
- ・名古屋、札幌など福島以外の地域にも広がり、過去2回、大風呂敷サミットを開催(2015・2017年)



(上) プロジェクト FUKUSHIMA! OGOマーク
 出典: <http://www.go-fukushima.jp/about/>



<結論>

・“福島大風呂敷”は、思想や血縁の違いが問題にならない、**新たな「あつまり」の仕掛け**となる
 ・「大風呂敷を作る・広げる」という共通の体験を通して、参加者の間に**<共>の領域**が生まれる
 ⇒震災を機に生じた(顕在化した)様々な問題を、福島固有の問題にさせない